

いよいよArtes MUNDI創刊号が出る。比喩的に言えば、船旅か飛行機の旅が始まるときのように気分が高揚するのを感じる。編集に携わったスタッフ、執筆者、デザイナーやイラストレーター、印刷所のみなさんも同じ気分を味わっているのではないだろうか。この雑誌は船であると同時に大学を象徴している。ただしここにあるのは、縦の関係でも閉ざされたセルでもなく、学部や学科を横断する開かれた共同体の自由な空間である。

グローバルズムが世界を覆い尽くしてしまったかに見える今、世の中では緩慢さが嫌われ、何事も素早く判断し、そして効率よく処理することが求められる。だがスピードは一方で、私たちからじっくり考える余裕を奪ってしまうことも確かだ。せめて思考を交換し、刺激し合い、互いに創造を促せるような場がほしい。広場、フォーラムがほしい。そうでなければ、車による通勤者の多いこの大学は、ただの建物と丘陵になってしまう。

二月の末、キャンパスには学生の姿があまりなかったが、初めて入ったアトリウムで意外な光景に出遭った。他の食堂や売店が開いていなかったためだろう、様々な学科の教員がそこに集い、食事をしながら歓談していたのだ。中には本誌タイトルの考案者である学長も混じっていた。これこそフォーラムではないか。猛獣も草食動物も共に水を飲むオアシス。話し声や笑いに満ちたフラットで幸福なユートピアがそこにあった。

新学部、新学科の創設、システムの再編が相次ぎ、人々の思考が一元的になり、ともすれば前方しか向いていないとき、アトリウムで見たような光景は重要だ。本誌はその再現を目指しているとも言える。人々が自分の経験や抱負、夢や希望を自由に語って披露し合い、批評し合う。するとこれまで見知らぬ他人だった人、あるいは一面しか見せていなかった人が、実に面白いことを考え、

貴重な経験や趣味の持ち主であり、魅力的な存在であったことがわかるだろう。本人にとってもそれは自らを再発見することになり、自信につながるはずだ。本来、大学のセルの外へ発信する力を備えている人材であれば、それを紹介しない手はない。大げさに言えば、ヴィム・ヴェンダースの映画『ベルリン・天使の詩』の一場面のように、モノクロの世界がカラーに変わるような瞬間を出現させたい。

この雑誌によって本学の学部や学科に、国際あるいは世界、そして教養という語が付されている理由を理解してもらえないのではなかろうか。平野啓一郎氏のボードレル論に呼応するかのようには執筆者たちは分人ぶりを発揮し、それぞれの教養、学芸についての知識やたしなみを盛んに披露している。座談会では教養をテーマにしたが、実は本学には教養人がいくらでもいるのだ。ただそれを披露する場がこれまでほとんどなかった。「世界あの町この街」には、教員の知られざる一面を知ってもらいたい、そしてそのパート自体が広場になってほしいという願いが込められている。

さらにこの創刊号では「テーマ書評」という柱を立て、イスラーム圏及び東南アジアという日頃問題にされながら、実際には理解されていないかかったり誤解されていたりする地域について、気鋭の若手専門家に寄稿を依頼した。これは本号の目玉と言ってもいい。また、国際情勢の変化にともなう学生のニューヨーク派遣中止を巡っての引率教員の思いや突然学生オーケストラの指揮をするようになった教員の奮闘記は、本誌と学生の接点ともなっている。とにかく書くこと、そしてそれを読むことで、何かが起こることを期待している。旅は始まった。